

ああ、相談業務

～悠斗^{はると}くんの話～

9

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

家庭児童相談員として、発達相談も受けていたが、5年ほど経ったところで、発達相談室を作ることになり、筆者は家庭児童相談室から発達相談室の方に移動することとなった。今回のケースは発達相談室で受けたケースである。

悠斗くん（仮名）家族

悠斗君は、土木技師の父親、専業主婦の母親と弟の四人家族。新興住宅街に一軒家を建てて住んでいる。もともと北海道の人ではなく、北海道の人が言う「内地」つまり、本州からの転入者である。父親の転職に伴って移住を決めたそうだ。その時まだ悠斗君は生まれて間もない赤ちゃんだった。北海道に知人もいない中、子育てを一生懸命頑張っていた母親と、新しい職場に慣れるのに大変な中、母親へのサポートも頑張っている父親という家族であった。

相談の始まり

1歳半児健診が悠斗君（以下本児）との出会いであった。1歳半の健診は1歳半を1か月余り過ぎてから行われるのが普通である。従って、筆者が出会ったときは、1歳8か月になる所だった。

この健診ではほぼ3語程度の発語の有無、指差しや言葉での指示の通り具合、人との関係性などを見ながら発達の確認をしている。発達に遅れが感じられても、経過を見ていくだけでよさそうな場合は、2歳時点での電話確認となることが多い。発達が遅れていると思われる場合は、健診の隣の隣の一部屋での発達相談に繋ぐ。発達相談に繋がった子の確認をするのが筆者たちの仕事である。出産時からの保護者の話も聞きながら、発達の様子を更に細かく確認する。発達検査として

は主に K 式発達検査を使う。そこでかなり遅れがみられると、定期的な発達相談や当時母子通園と呼ばれる今の発達支援センターにつなげる。発達障害の子どもへの早期発見、早期療育をめざしたシステムである。

その健診時に、発達相談に繋がってきたのが本児であった。言葉が少ない、視線が合いづらいなどが、健診場面で保健師が感じたことだった。また、母親の様子も気になるとのことで、相談となった。

相談室は、和室で、そこに長座卓を置いて、母親との面談や、検査などを行うようにしている。子ども担当と母親担当で分担し、筆者は母親担当として話を聞いた。

この母親について、保健師がどこに引っかかったのかは、すぐわかった。母親自身に落ち着きがないし、子どもは一人で遊び、母親は関わろうとしなかった。

母親にその点を確認すると、「姑が、子どもが一人遊びをしているときは声をかけてはいけなと教えられた。初めての子育てで、何もわからないので、そういうものなのだと思っていた。違ったのか？」と泣き出した。

子育てについて、知識がない母親というだけなのか、それとも別の何かがあるのか、ここからこのケースとの長い長い付き合いが始まった。

相談経過

本児の発達支援ということで、母子通園に繋ぐことになったが、通園がいっぱいだったため、遅れは大きくないが、関わりで変わりそうな子を集めたグループを作ることになり、そこに本児も入ることになった。グループは、筆者と指導員 2名の 3 名で開催し、筆者は母親のグループを担当、指導員が子どもたちと色々な遊びをしていくというものである。子どもたちは経験不足もあるため、芝生の上ではだしになったり、泥んこ遊び

や砂場遊びを経験したり、様々な経験をグループで積む中で変化していった。

本児も、最初は人への関心が弱く、一人で遊ぼうとしたり、芝生をはだして歩くことに抵抗したりしたが、徐々に慣れ、友達と一緒に遊べるようになっていった。

当時はグループが初めての試みであり、スタート時は子ども 3 人、母親 3 人の小さなものだったが徐々に増え、最終的には 6 人の子どもたちと 6 人の母親たちとなった。

母親たちの話は、子育ての事だけではなく、舅姑の話、夫への不満、実家への不満等多岐にわたり、ストレスを吐き出すとしての役割も大きかった。他の母親たちの話を聴く中で、子どもたちにより良いかわりができるようになっていった。母親同士のつながりもでき、支え合える関係が築けるようになった。MCG（注1）のようなものである。

こうした母親たちのグループの中でも、本児の母親は、少し目立っていた。凄く若いわけではないが、物を知らないし、ついつい余計なことまで言ってしまったり、マイペースに話してしまったりと、周りの人との調整が当初難しかった。どの母親も何かしら話したい様子を見せていたので、一人がずっと話しているのはご法度である。上手く止めながら、みんながそれぞれ同程度に話せるように調整するのだが、本児の母親の晩になると、長くなりがちだった。

この母親は、とても素直なところもあり、教えたり指導したりすると、必ずその通りにやる所があった。指導員から子どもの様子を伝えて、こんな遊びをしてみようと言うと、しっかり次回まで試してくるので、本児も変化していったのだと思う。子どもの変化と一緒に喜び、母親を褒めて、自ら本児に上手に関われるように母親を育てていくのも我々の仕事である。

子どもにとって何といっても一番関わりの多い人は母親である。あるいは母親に代わる保護者である。その保護者との関係性が上手く育たなければ、子ども自身の情緒面の発達に歪み生まれ

ることも多い。従って、我々支援者は常に、子どもと保護者との関係を確認し、齟齬があれば修正を試み、子どもと保護者の関係がスムーズに、心地の良いものになるように気を付けていた。

本児は、グループの効果もあって、母子通園に通うこともなく、幼稚園に入園した。幼稚園では特に問題行動等はなかった。本児は飛行機が大好きで、空港に遊びに行ったら飛行機を見て喜んでいた。そんな子だから、飛行機にはとても詳しく、これは何という飛行機だとか、どこの航空会社だとか、すぐに覚えて教えてくれた。そして将来はパイロットになりたいと言っていた。幼稚園に入ったことで、グループは終了となり、母親とは時々様子を確認するための面談を持つ程度で数年が過ぎた。

本児も小学校に上がって、勉強も友人関係も特に問題ないと聞いていた。ところが中学年になったある日、母親から相談があった。「学校の先生から、本児がクレヨンや絵の具の色をあまり使わない。特に赤を使わないと言われた。もしかしたら色盲とか色弱とかないだろうか」というのである。聞けば、母親自身の家系に色弱があって、母親の弟が色弱だという。

色弱遺伝子は X 染色体が運ぶため、母親が保因者である場合、男子が生まれると 50%の確率で、色弱になる。女子の場合は、父親、母親双方の X 染色体に色弱遺伝子がある場合にのみ色弱となるが、片方だけの場合は保因者にはなるがほとんどの場合色弱にはならない。

つまりこの母親自身に色覚異常はないが、本児には異常が出たのではないかということである。

最近では学校で色覚検査をしないためわからないまま過ごしている子は多いかもしれない。

母親が心配ならばということで、病院に行って調べてもらったところ、赤緑色弱、すなわち赤と緑の区別が余りつかず、同じように見えてしまうのである。その段階で、母親も父親もがっかりしたのは言うまでもない。本児はパイロットを目指して頑張りたいと言っていた子である。パイロットは操縦席から見える飛行機の緑と赤のランプ

でその飛行機がどっち向きに飛んでいるかを見分ける。すべての飛行機には左翼には赤ランプ、右翼には緑ランプがついている。操縦席から見て、右に赤ランプが見えたらこちらに向かってきているし、緑ランプが見えたら同じ方向に進んでいる。その見極めができなければ、時速数百キロで飛んでいる飛行機がぶつかることにもなりかねない。その他にも様々な機械の操縦盤にも、赤と緑のランプが多い。赤緑色弱があると、パイロットにはなれない。今は、矯正眼鏡なるものがあるが、パイロットになるには、矯正眼鏡は認められないのである。

本児にとって大きな挫折であった。打ちひしがれた本児と話す中で、「確かにパイロットにはなれないけど、飛行機がそんなに好きなら、航空会社で働くのはどうかな、考えてみては？」と伝えたところ、本児は気持ちを切り替えることができたようだった。

小学校を特に問題なく卒業し、中学、高校と順調に進んだ彼が、その後の進路に選んだのは、航空専門学校であった。やはり、飛行機のそばで働きたいという思いが強かったのだ。

色弱はあっても、地上職であれば会社によっては就職可能である。本児は、無事グラウンドハンドリング職員として就職できた。

こうして本児との面談は、2歳前から20歳に至るまで続き、終了した。本児については、順調に進んでいったが、この家庭では、途中で別の問題も浮上した。

一つは父親の失職である。本児が小学校6年になったころ、父親の勤めていた会社が倒産したのである。母親はずっと専業主婦で働いたことがなかった。父親はまずは飲食店に就職した。しかし元々が技師である。対人面がそんなに得意なわけではないし、口も達者な方ではなかった。飲食店の仕事は上手く行かず、すぐに辞めることになる。父親の相談に乗りながら、もっと父親の性格に合った仕事を探すよう助言していた。しばらく貯金を崩すような日々が続き、母親も初めてスーパーのレジのパートに入った。母親はどちらかと

いうとADHDが感じられるような、落ち着きのない方である。ただ、人当りは悪くなかった。失敗は多いかもしれないが、まあ何とかかなるかなと思いつつ、見守っていた。案の定、時々ミスがあって落ち込むこともあったが、慣れれば大丈夫だからと支え、何とかレジのパートを続けることができた。母親のわずかな収入だけでやっていけるわけもなく、父親は就職活動を続け、漸く見つけたのが、技師としての能力を発揮できる仕事であった。これでこの件は一件落着きであった。

もう一つは、弟の問題である。本児が幼稚園の年中になるころ弟が生まれた。最初は順調だったが、1歳半頃から弟の落ち着きのなさが目立ち、結局3歳から母子通園で療育を受けることになった。ADHDの診断を受け、母親は弟の通園に付き添っていた。療育を受けながら、幼稚園、小学校と進んでいくが、どこでも、トラブルメーカーとされ、そのたびに母親と弟の言い合いが始まり、二人の関係が悪化した。特に中学の頃は問題行動は激しくなり、家出を繰り返したり、自殺企図があるなど大変であった。母親の相談に乗りながら、弟へのかかわり方などを一緒に考えて行った。しかし、母親自身もADHDの傾向を持つため、どうしても中々上手く行かず、母子の関係性の悪化が、父母の関係にもひびを入れ始めていた。父親は無口だが穏やかな人で、父親が弟にとって唯一の理解者となっていく。何度となく父母面接を繰り返し、二人の関係を調整しつつ、問題行動の多い弟の対処に医療機関との連携も含め、三人で頭を悩ませながら月日が進んでいく。そして本児も弟の問題で相談に来たりしながら、弟が高校入学まで相談は続いたのであった。弟は無事高校に入学し、アルバイトをしながら、自分の特性と向き合いはじめ、薬の力も借りながら、落ち着いていった。

まとめ

筆者は悠斗君一家と家庭児童相談員として関わりはじめ、その後、市役所を退職し、カウンセリングルームを立ち上げ、臨床心理士としてスクールカウンセリングも含め様々な活動をするようになっていった中で、継続的に関わることができた多くのケースの中の一つである。地域に根差した活動というのは、こういうものだという例ではないかと思う。市役所を退職後も、市の関係の仕事をしていたため、市内の子どもたちの相談は無料で受けていた。

幼児期から、あるいは場合によっては乳児期から関わり、大人になるまで何かあるたびに相談に乗る。筆者にとって、そういう形が一番望ましいと思っている。そして最終的に自分自身で自信をもって、問題解決をしながら、生きていけるようになれば良い。

悠斗君一家は、悠斗君との関り、母親との関り、弟の問題行動、夫婦の問題と、目まぐるしくその主訴は変わっていったが、家族はみんなつながっている。一人に何かあれば、その影響を他の成員も受ける。我々支援者は、誰か一人だけの問題として関わるのではなく、家族全体に様々なことが起こる中で、家族全体を支えていくことの重要性を感じたケースであった。

注1) MCG (Mother and Child Group) 話したいことをなんでも話してよい環境の中で、自分の子育てや子どもとの関係、あるいは自分自身の育ちなどを語り、他の参加者の話を聴く中で、子育てに関する不安や、自信喪失を防ぎ、虐待を予防していくプログラム。